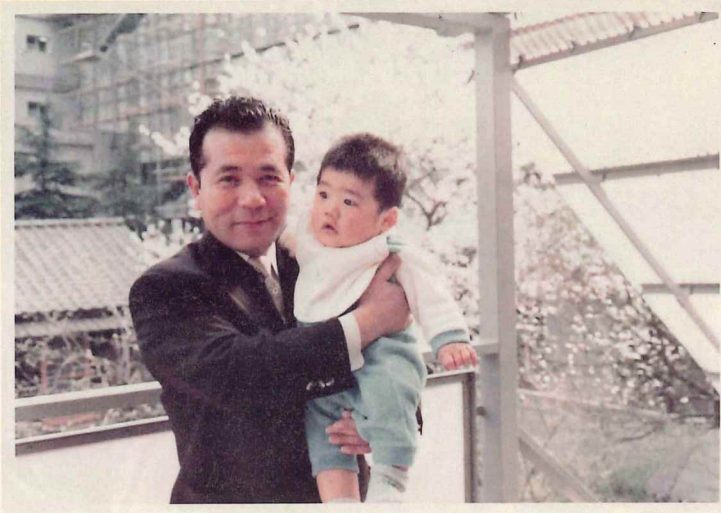




福島 範治 NORIHARU FUKUSHIMA

1970年東京生まれ。93年青山学院大学経営学部卒業後、第一勧業銀行入行。98年父親が社長を務める鹿沼CCに入社。99年代表取締役副社長。04年民事再生法の適用を申請。代表取締役を退任し、執行役員副社長へ。スポンサーを入れずに自力再生を果たし08年代表取締役社長就任。現在、栃木県内で鹿沼グループ代表として3つのゴルフ場を運営。



現金主義だった父は、事業が好調だった頃、いつも分厚い財布を持ち歩いていて。不況になるとその財布は細くなってゆき、艶々と恰幅がよくなった顔も老け込んだ。一度、父の運転で駅まで送ってもらったことがあるが、何度もぶつけそうになり、平静



うえの しげみ 上野 重三さん

鹿沼カントリー倶楽部 顧問

今年で勤続53年目、人生の大半以上鹿沼グループと共に生きて参りました。若かった頃の私に温かい声掛けをして何かと励ましてくれた先代社長と思いやりと愛情を持って接して下さる現社長のお陰と感謝しております。グループ内の異動は10回目を数えますが、どの部署でも大好きなゴルフに関わりお客様の笑顔と楽しそうな会話に接し、やりがいと幸せな気持ちにさせて頂いております。これからも次のゴルフ場を創造していく鹿沼グループを楽しみにしております。

を保つのが難しいようにみえた横顔が、悲しかった。「助けたい」その想いが、父の会社を継承する理由のひとつだった。28歳で経営企画室課長として入社した私は、資金繰りで困窮を極める鹿沼グループの経営に携わる。足利銀行からの出向者と共に金融機関交渉に行脚し、資金繰り会議という名の「支払先延ばし会議」を行い、税金滞納のお詫びに税務署を回った。入社した月から給与遅配が続く、社員にも頭を下げ続けた。社会人ラグビーをやめた私は、ストレスから30キロも太ってしまった。

その後、金融機関からの要請で代表取締役就任。「ターンアラウンドマネージャー」（企業再生請負人）と聞かえは良いが、ファンドではないので泥臭い仕事だ。投げ出そうとは思わなかった。というより、考える暇もない。疲れ果てて寝てしまい、起きたらまた一日が始まる。ラグビーのように、タックルをしては起き上がり、また走りだす。ゴルフ場も夜が来て、朝になると来客を迎える。その繰り返し。5年経ち、資金繰りも改善し、少しは眠れる日が来たが、時代は急速に悪化する。「不良債権処理」という言葉が、世の中を席巻していた。

っていた。が、それ以上に経営難によるストレスがあったのだろう。ブル崩壊でゴルフ場は一気に経営不振に陥る。会員権はまったく売れず、来場者もプレー単価も急降下していく。ゴルフ場の収益で支えていたグループ経営も根底から崩れていった。

火中の栗を拾う

不動産という資産をテコに融資を中心に拡大していったこともあり、父が倒れた時、銀行からの借入金金は5

50億円に達していた。売上高の数倍の巨額な借金だった。それから一年後、私は父が作った鹿沼グループに入社した。メイン銀行であった足利銀行から声を掛けられ、経営再建のために後継者として白羽の矢を立てられた。白羽の矢というよりも、火中の栗を拾う立場だったかもしれない。

当時、私は父の事業とは無縁の大手都銀に勤めていたが、銀行員だけに父の会社の苦境は何となく感じていた。火中の栗を拾う役回りだが、どれだけ過酷かも想像できる。銀行員としての将来と天秤にかけて悩み抜くが、結局、火中に飛び込む決意を固めた。



1 「助けたい」一心で借金550億円の父の会社を継ぐ

今年の夏、GEW片山社長の来訪を得、新連載のタイトルが「牛魂一擲でいきましよう」と即決した。牛魂一擲は、弊社が販売しているカルビラーメンの商品名で、「乾坤一擲」という言葉から取っている。運命をかけて、のるかそるかの勝負をすること。振り返れば、私の人生も大勝負の連続だったように思う。

その折々で、どのような壁が現われて、乗り越えたり、跳ね返されてきたのか……。赤裸々につづってゆくことで、読者諸氏の参考になれば幸いである。

私の父、福島文雄は昭和2年5月27日に生まれ、平成23年に84歳で亡くなった。生きていれば98歳。その父がゴルフビジネスに携わったのは40歳頃のことだった。昭和40年代、高度経済成長に沸く日本はゴルフブームに突入。当時父は「帝国観光」という大衆ゴルフコースの経営会社に営業部長で入社した。その前は職を転々としていたと聞いている。

「いつか何かあててやる」ジャパニーズドリームを掴むべく様々な事業にチャレンジしたらしい。その帝国観光が倒産した。父の生まれた鹿沼にあった鹿沼カントリー倶楽部も帝国観光が経営していたが、倒産後、ある個人が買収するも、キヤデいの労働争議などが発生して経営が立ちいかなくなり、父に相談が来たらしい。

たまたま、前職の建設会社を経営していた頃、所有していた土地が東北自動車道の開発にかかり、運よくまとまった資金を得た父は、鹿沼カントリー倶楽部を買収した。乾坤一擲、事業家として夢を掴むべくこのチャンスに飛び乗った。

事業はまたたく間に拡大する。鹿沼72カントリークラブ、富士御殿場ゴルフ倶楽部（現PGM御殿場東名GC）、栃木ヶ丘ゴルフ倶楽部に加え、都内ではアスレチッククラブ、県内では新聞社、海外でのコヒー園まで、グループ企業は20社を超え、従業員2000人の巨大企業に膨張していった。

その間、私は東京で恵まれた生活を送っていた。都内の一貫校に入学し、友人達とラグビーに明け暮れる日々。だが父には家庭がいくつかあり、私は東京の家で育った。鹿沼にいる父方の祖父母には会ったこともなかったが、何の不安や不満も感じず、都内ですくすく育っていた。父には家庭がいくつかあった。気の知れた人にそう話すと、「よくクレませんでしたね」と言われることもあるが、少年期の私は世をスネたり、グれることも全くなかった。それは、限られた時間でも父がしっかりと愛情を注いでくれたからだと思う。

小柄な父は、お腹がどつぷりと出ているが、足元はいつも外国製のピカピカな革靴で、髪型はイタリアマフィアのようにオールバック。そしてアラミスのオーデコロンをたつぷりとつけていた。幼少期、父は夜中に私の部屋に入ってきて、アラミスの強烈な香りと共に私に頬ずりをする。目が覚めても、つい寝たふりをしていたが、その記憶と感覚、匂いは今も鮮明に残っている。

その父が脳梗塞で倒れた。平成9年、69歳の時だった。酒は飲めなかったが、饅頭が大好きで糖尿病を患